

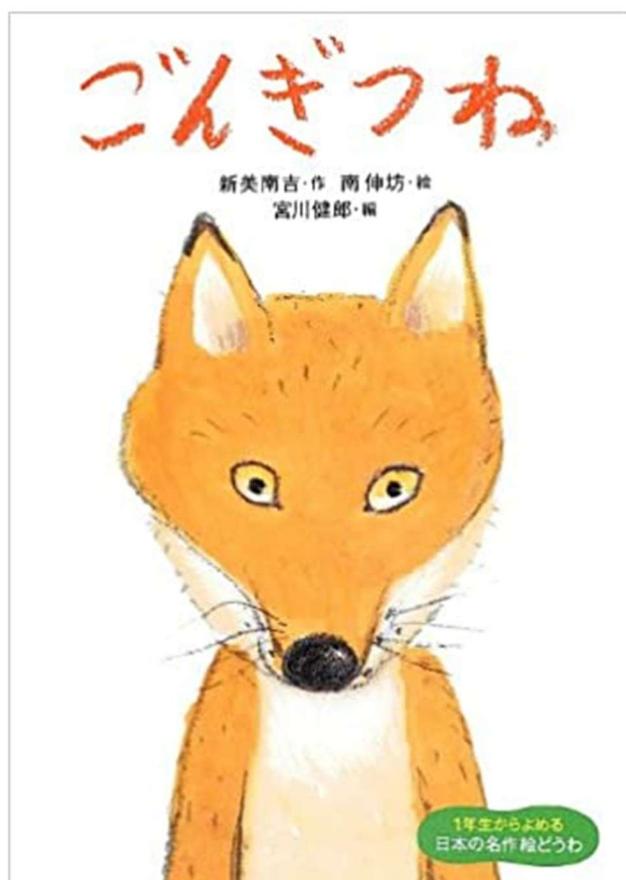
# 館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 7 月 21 日(月)

発行 館長 加藤 智 一

## 国語力崩壊「ごんぎつね」の読めない小学生たち



石井光太氏による、「ルポ 誰が国語力を殺すのか」(文春文庫)の一部を抜粋して紹介します。

「ごんぎつね」は、新美南吉が 18 歳の時に書いた児童文学で、半世紀以上も国語の教材として使われてきました。おおまかな内容は、『ある山に、「ごん」という狐が住んでいました。「ごん」は悪ふざけが好きで、近くの村の人たちに迷惑ばかりかけていました。その日も、小川で兵十という男性が獲ったうなぎや魚を逃がしてしまいました。10 日ほど経った日、「ごん」は兵十の家で母親の葬儀が行われているのを見かけます。そこで、兵十が川で魚を獲っていたのは、病気の母親に食べさせるためだったのかと気づきます。自分はそれを知らずに逃がしてしまったのだと。「ごん」は反省し、罪滅ぼしのために毎日のように兵十の家へ行き、内緒で栗や松茸を置いています。そんなある日、兵十は自分の家に「ごん」が忍び込んでいるのを目撃します。彼は、いたずらをしに来た、と早とちりして火縄銃で撃ち殺してし

まいます。しかし、土間に栗が置かれているのを見て、これまで食べ物を運んでくれていたのが「ごん」だったことに気づき、その場に立ちすくみます。』というお話。

石井氏が都内のある公立小学校から講演会に招かれた時のこと、校長先生が学校の空気を感じてほしいと国語の授業見学をさせてくれました。小学 4 年生の教室の後方から授業を見ていたところ、生徒の間から耳を疑うような発言が飛び交いました。それは、「ごん」が兵十の母親の葬儀に出くわす場面。そこでは、兵十の家に村人たちが集まり、葬儀の準備をしているシーンが描かれています。家の前では、よそいきの着物を着て、腰に手ぬぐいを下げたりした女たちが、大きな鍋で料理をしています。この一説を読んだ後、先生は生徒達に問います。「班ごとにわかれてどういう場面だったかを話し合い、意見を述べてください。」すると驚いたことに、こんな意見が、「この話の場面は、死んだお母さんをお鍋に入れて消毒しているところだと思います。」「私たちの班の意見は違います。もう死んでいるお母さんを消毒しても意味ないです。それより、昔はお墓がなかったので、死んだ人は燃やす代わりにお湯で煮て骨にしていたんだと思います。」「昔もお墓はあったはずです。だって、うちのおばあちゃんのお墓はあるから。でも、昔は焼くところ(火葬場)がないから、お湯で溶かして骨にしてから、お墓に埋めなければならなかったんだと思います。」「うちの班も同じです。死体をそのままにしたら、ばい菌とかすごいから、煮て骨にして土に埋めたんだと思います。」葬儀で村の女性たちが正装をして力を合わせて大きな鍋で何かを煮ていると書かれていることから、常識的に読めば、参列者にふるまう食事を用意している場面だと想像できるはずですが、生徒達は決してふざけて答えている訳ではないのです。しかし、8 つの班のうち 5 つの班が、3、4 人で話し合った結論として、「死体を煮る」と答えているのです。みんな真剣な表情で、冗談めかした様子は微塵もありません。この学校は一学年 4 クラスの、学力レベルとしてはごく普通の小学校です。私たちは、何か大きなものにつまずいていないのではないかと、考えさせられる出来事でした。

